

ギャンブル依存症の女性は推計75万人 NHKテレビ「追跡！真相ファイル・パチンコにハマる女たち」

「1万円なんて紙切れのような感じでした。気付けば5000万もの借金をして、死ねば保険金で借金はチャラになるって……」

昨年12月27日の午後10時55分、NHKテレビの年末特集「追跡！真相ファイル」の2回目「パチンコにハマる女たち」が放送された。追跡レポーターの小島慶子、追跡キヤップの鎌田靖、追跡チームの小林孝司が女性のパチンコ依存症に迫る。

番組によれば、厚労省調査からの推計ではギャンブル依存症の女性は全国75万人。小島が会ったサ

キさん(仮名、40歳)もそうで、地方出身で友だちが少なく寂しい毎日を通していたが、20代前半のとき何気なく入った近所のパチンコ店で5000円で5万円近く稼いでギャンブルにハマり、今も苦しみを繰り返している。「やめなくちゃ、でもやめられない、どうしよう。ずっとそうでした」と振り返る。

依存症に陥るメカニズムを長野県の諏訪東京理科大学の篠原菊紀教授に取材。パチンコで当たったりすると興奮作用のドーパミンが脳に分泌され、また行こうという気持ちが進まされるという。森山成

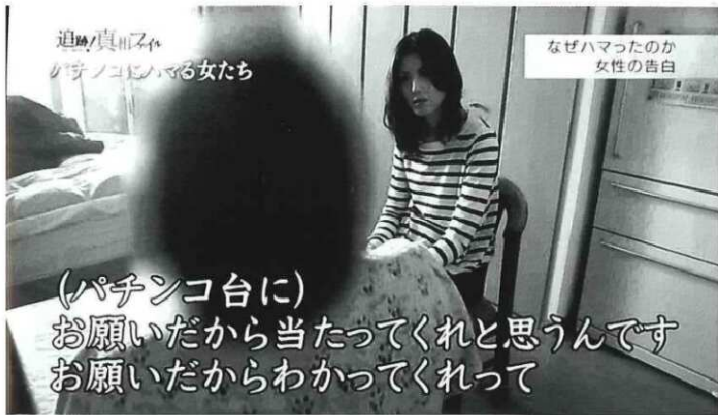
株(なりあきら)精神科医師によると、依存症に至るまでの平均期間は男性10年、女性5年で、男性が一攫千金を求めるのに対して女性はストレス解消のために通うとのこと。サキさんは治療が始まってからもやめられず、ほかの客の玉を盗んで発見されたりした後、最近ようやくパチンコへの衝動を抑えられるようになった。

そして、なぜ取りつかれていたのか、その理由が分かっていたという。「寂しい。1人で本当に寂しいと思って、お願いだから当たってくれと思うんです。当たると、分かっ

てくれた、私の思いが通じたという感覚になって、(パチンコ)は友だちって本気で思いました」。人間関係で満たされないものをパチンコに求めていたようだ。サキさんはお金がほしくて行っていたのではない。ではなぜ女性たちはパチンコ店に足を運ぶのか? 小島は女性向けのサービスを入れているマルハン昭島店(東京)に行き、パチンコを初めて体験。パチンコ店が多く女性が気軽に過ごせる場所になっていることを実感する。

福岡県の八幡厚生病院、目標通りやめられるのは4割ほど

鎌田が依存症治療に取り組み福岡県の八幡厚生病院に行き、パチンコ依存症になり入院中の2人の女性に会う。入院治療は3カ月間。パチンコへの依存ですさんだ生活



追跡/真相ファイル
パチンコにハマる女たち

なぜハマったのか
女性の告白

(パチンコ台に)
お願いだから当たってくれと思うんです
お願いだからわかってくれって

寂しい毎日過ごしていたサキさんは、当時の気持ちを小島(右奥)に話す(12月27日NHKテレビ「追跡！真相ファイル・パチンコにハマる女たち」より。以下同じ)



追跡/真相ファイル
パチンコにハマる女たち

真相ファイル

なぜ女性たちがパチンコにハマるのか真相を追う、
左から鎌田靖、小島慶子、小林孝司の3人



追跡/真相ファイル
パチンコにハマる女たち

ギャンブル依存症
治療現場の訴え

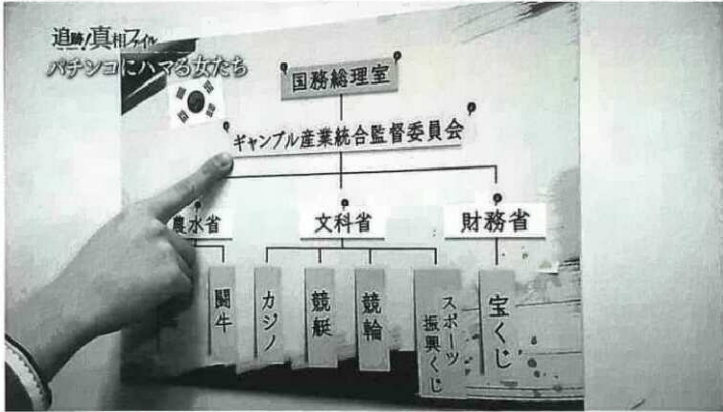
鎌田(左)は福岡県の八幡厚生病院で、パチンコ依存症になり入院中の女性2人に話を聞く



追跡/真相ファイル
パチンコにハマる女たち

ギャンブル依存症
治療現場の訴え

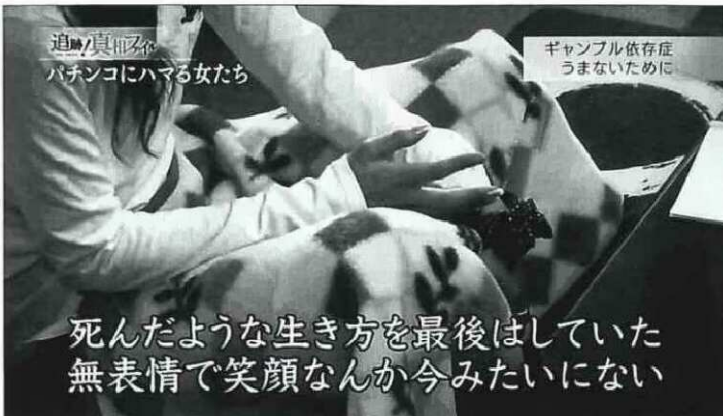
(パチンコによる依存症は)
どんな人でもなる。なったら悲惨な病気
その予防線を張るのは国の責務



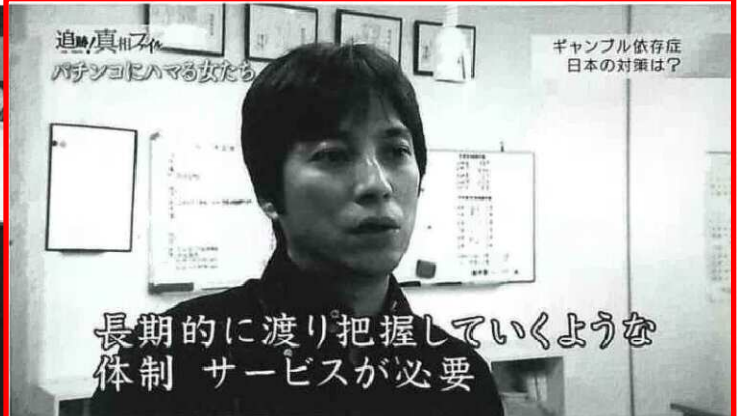
番組では韓国のギャンブル依存症対策の制度もボードで説明された



社会全体でギャンブル依存症対策に取り組み、設立された韓国の「国立賭博中毒予防治療センター」



神奈川県「NPO法人ヌジュミ」でも、ギャンブル依存症の女性たちの話を聞く



取材に応える沖縄県の「リカバリーサポート・ネットワーク」の西村直之代表理事

の改善に取り組みながら、医師のカウンセリングを受けて自分を見つめ直すことで、パチンコへの衝動を抑えていく。しかし、入院中だから抑えられているが「大金を目的前にして、あげる、使っていく」と言われたら、まだパチンコに行ってしまうのではないかと不安はあります」と女性は話す。目標通りやめられるのは4割ほどだそうだが、この地でギャンブル依存症患者を300人以上診てきた(前出の)森山医師は「一言で言わせてもらうと生活習慣病だと思えますよ。どんな人でもそれ(パチンコ依存症)に染まるし、染まったらもう悲惨な病気に陥っていきますから、その予防線を張り、恐ろしさを説くのは教育なり、国の責務だと思いますよ」と語る。さらに、自分はギャンブル依存症、来たらず拒否してと

「一方の日本、国をあげての依存症対策はとられていません。パチンコ業界は独自に取り組んでます(ナレーション)として、沖縄県の「NPO法人リカバリーサポート・ネットワーク(RSN)」が電話相談を受けている様子を取材。相談員はたった3人。業界団体の支援金毎年3000万円で運営され

「長期にわたり把握する体制が必要」と説くRSNの西村代表

頼める外国のカジノを例に出し、「そういうパチンコ・スロット店が日本どこにありますが。病人が来てどうぞ、どうぞですか。(日本は無策ですよ、本当に)」と嘆く。小林は韓国環境省の保管施設に行き、日本のパチンコを真似た「バダイヤギ」や改造パチンコ機を見る。7年ほど前から人気を集めたが、ギャンブル性が高く依存症が急増。借金がかさんでの自殺や金ほしさの犯罪が相次いだために撤去された機械だ。依存症の危険を訴え国を動かした市民団体のイチンオさん、イさんが頼った国会議員(当時)のソン・ボンクさんに話を聞く。

2人の運動や世論の後押しで、国の運営ですべて無料でギャンブル依存症を治療する「国立賭博中毒予防治療センター」設立の法案が可決され、現在は(準備中も含め)全国に5カ所設立。運営費は年間4億5000万円。国とギャンブル産業が半額ずつ負担。すでに1万2000人以上が相談を寄せられているという。

「ギャンブル依存症に苦しむ女性たち75万人。私たちの社会は、この病と本気で向き合うことができるのでしょうか(ナレーション)」と問題を投げかけて番組は終了。

ていることも紹介された。西村直之代表理事は「電話相談というのは入口に過ぎません。そのあと、この人たちがどんなふうになっていくかというフォローアップが、正直そこまで今できていません。長期的にわたって把握していくような、そういう体制、サービスがぜひ必要だと思います」と話した。

社会全体でギャンブル依存症対策に取り組んだ韓国の国家体制と、各官庁が公営ギャンブルを抱える縦割りの日本との違いを、小林がボードで説明する。そして日本については「ギャンブル依存症のことを認識して対策しているか(関係省庁に)聞く、それはしていません」と結論付けた。小島はさらに、神奈川県「NPO法人ヌジュミ」を訪れ話を聞く。ギャンブル依存症の女性たちが支援している、週5日女性たちが集まり自分の体験を語り合う。

小島は女性たちと話をしてみても、自分が食べるのをやめられなかった経験から「もしかしたら私が経験したものと同じかなって」。パチンコは手段ですよね。そこに手段があったから依存症になつてしまった。じゃあ、その手段をなんで必要としたのかということとちゃんと向き合うための時間が、やっぱり依存症を治すためには必要なのかなって」と少し納得できた様子。